

(研究ノート)

ドゥルーズ＝ガタリ資本主義論に関する覚書

—先行研究整理と課題抽出

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

【目次】

はじめに

1. DG による資本主義理解の諸論点

1-1. 形式的包摂と実質的包摂

1-2. 極限の置き換え

1-3. 通貨の二元性

1-4. 本源の蓄積

2. DG による資本主義への価値評価と提案

2-1. シニシズムの時代としての資本主義

2-2. 脱領土化の運動の加速

結論に代えて

はじめに

ドゥルーズ＝ガタリ（以下 DG と表記）が『アンチ・オイディプス』を書いた時代から 40 年を経て、大きく世界の経済構造や国家システムが変化した今、敢えて DG による資本主義理解を再検討することを端緒とし、引いては現代における有効な資本主義批判の言説の可能性の検討にまで及ぶことを企図する者にとっては、重なり合う幾つかの課題を、恐らくは以下の順に一步一步解いていく必要があるはずである。1) DG 理論とマルクス及びマルクスに影響を受けた哲学者・思想家・経済学者の議論との関係性や、DG 理論の独自性の再検討・再評価、2) マルクス思想・経済学そのものの現代資本主義理解についての有効性と無効性、現代の経済学・資本主義理解に関する諸理論との関係性、3) 上記の課題の結果を踏まえた上での、現代における資本主義批判の論点や根拠の再検討。本稿は 1) について、しかもその一部に関してのみ準備的に遂行した調査研究の覚書に過ぎない。

1. DG による資本主義理解の諸論点

DG による資本主義理解の特徴を為し、再検討に値する論点としては、大よそ以下が挙げられるだろう。1) 形式的包摂と実質的包摂、2) 極限の置き換え、3) 通貨の二元性、4) 本源の蓄積。以下、DG の論脈と検討必要事項を整理する。

1-1. 形式的包摂と実質的包摂

DG によると、「資本主義自体は、脱コード化した諸々の流れの上に構築された唯一の社会機械である」。彼らは「売却される諸財産の流れ、流通する貨幣の流れ、見えないところで準備される生産と生産諸手段との流れ、脱領土化する労働者達の流れ。資本主義が誕生するには、これら全ての脱領土化する流れが遭遇、接続し相互に反応しあい、更にこの遭遇、接続、反応が偶然にも同時に生じる必要があるだろう。・・・世界史は偶然の歴史としてしか存在しない」（“L’anti-Œdipe” [以下 A0 と表記] ,p265）¹ と言う。

DG はこの考え方について E・バリバールによるマルクス研究を参照しており、我々としては第一の作業としてバリバールの理論のみならず、マルクス自身の「形式的包摂・実質的包摂」の議論へと遡行し、マルクスの着想の根拠や歴史的事実への参照を再確認・再検討する必要があるだろう²。

先行研究に目を向けると、Read(2008)³はこう纏めている。資本主義は、マルクスが「形式的包摂」と呼んだ「抽象的な主観的ポテンシャル」と「抽象的な富」との出会いにより始まり、この地点から所与であった技術的社会的条件を变形し「具体

化」していく。これが、マルクスが「実質的包摂」と呼ぶものである（「歴史は抽象から具体へと進む」）。また資本主義は、知識を様々なヒエラルキーへ従属させていた様々なコードを解体し、知識を利益という公理にのみ従属させるようにすることで、社会の持つ一般的知識を生産力へと変形させる。結果、「知識・情報・専門教育は、最も単純な労働者による労働が資本の一部であるのと同様に、資本の一部となる（知識資本）」とされる。

DG 理論に大きな影響を受けているハート&ネグリも、その著書の中で形式的包摂と実質的包摂の問題を度々論じている点にも注目せねばならない。著書『帝国』の中で「資本主義における社会の包摂は世界市場の建設を以て完成される傾向にある」と認識する彼らは、形式的包摂から実質的包摂への移行を認めつつも、その移行は「様々な活動的な主体的力が行う諸実践を通じて説明されねばならない」と述べているが、この言明の内実を更に明瞭に理解する必要がある。4また、近著『コモンウェルス』においては「グローバル化する資本主義的世界においては、形式的包摂と実質的包摂に向かう動きが同時に存在している」と述べ、これは近年、「古臭い寄生的な資本主義的領有の形態」が再出現してきたことに対応すると言う。この論点についても、彼らが参照を指示するハーヴェイの「略奪による蓄積」という批判とも絡めつつ、マルクスや DG 理論との関係を検討する必要がある。5

1-2. 極限の置き換え

Tynan(2009)によれば、マルクスは「資本の究極的目的は自らをより大きな形で再生産すること」だと主張した。それは再生産が付加する自らに内在的な極限の場所を移動させる為であり、こう考えることによってのみ、資本主義のグローバルな支配が説明されうると言う6。

DG も資本の運動についてはマルクスの考えを継承している。彼らはこう言う。

「資本主義が全ての社会の外なる極限であるのは、資本主義がそれ自身として外なる極限を持たないからではなく、ただ資本それ自身という内的な限界のみを持つからである。資本主義はこの極限に達することはなく、それを常に置き換えつつ再生産する。」(AO,p274)「資本主義は、抽象的な富の主観的本質(生産の為の生産)をたえず発展させることでしか進行できない。・・・しかし他方同時に、資本主義はそれが<資本の為の生産、存在する資本の拡大発展>を追求する特定の生産様式である限りで、それ固有の限定的な目的の枠内においてしか、進行できない。」(AO,p3097)

Goodchild(1996)⁸によれば、DG はマルクスが「利潤率の傾向的低下」という形で記述した、資本主義の経済的限界の問題にも関心を示しているが⁹、資本が自らの限界に直面し乗り越えられることが明らかになって以降の時代に生きているという歴史的アドバンテージの下で思考している。「投資資本と交換資本との偽の等価性」により理論化される、資本が自らの内在的極限を置き換えていく傾向は、DG にとって資本主義社会の持つ本質的特徴の一つとなると彼は言う¹⁰。この Goodchild の解釈は妥当なものだろうが聊か説明不足でもあると言わざるをえない。更に議論の細部を詰める為には、まずはマルクスの「利潤率の傾向的低下」に関する諸議論を踏まえた上で、なぜ二種類の資本の「偽の等価性」により、資本が内在的極限を置き換えることができるのかを問い直す必要があるだろう。

資本主義の運動を継続させる為の装置としても一つ、DG が「反生産」と呼ぶ事象を再検討する必要もある。彼らは言う。「国家やその警察・軍隊は反生産の巨大な試みを形成するが、それらは生産自体の只中で、生産を条件づけている。・・・反生産装置は生産する機械の至るところに浸透し、この機械と密接に結びつき生産性を調整して、剰余価値を現実化する。・・・反生産装置の伝播が、資本主義の全体系の特徴である。・・・反生産の伝播の

みが、資本主義の至高の目標、即ち、過剰資源を吸収する反生産の働きによって、大きな全体の中に欠如を生産し、たえず余剰の存在するところに欠如を導入することである。」(AO,p280)

Tynan (2009) によると、資本家は、労働者の窮乏化という形で、労働者の消費能力が絶えず資本自身により損なわれていくという問題を抱えているので、資本主義は消費を必ずしも含まない実現のモデルを産み出すこととなる。これが国家・警察・軍隊等に代表される「反生産装置」であり、実際のところ資本とは生産と反生産との統一として定義されうると言う¹¹。この「反生産」のテーマについては、Tynan (2009) が言及する Rosa Luxemburg や Sweezy&Baran などの歴史的議論を踏まえつつ、DG による理解の意味と可能性を検討する必要があるだろう。

1-3. 通貨の二元性

DG は AO において通貨の二元性、銀行の二元性について以下のように述べている。「資本主義システムにおける銀行の二元性は、支払い手段の組織化と融資構造との間に、通貨管理と資本主義的蓄積融資との間に、また交換通貨と信用通貨との間に存在するが、この二元性の重要性は指摘されてきた。銀行が融資と支払いの両者に参加し、両者の合流点に存在することは、この両者の間に多様な相互作用が存在することを専ら示している。・・・システム全体と欲望の備給とを管理しているのは、ある意味で銀行である。」(AO,p271-272)

Read(2008)によると、DG は貨幣が「欲望の大量な再組織化」を構成すると考える点でマルクスの思考を継承している。(貨幣は欲望の普遍的対象となる。) マルクスが『資本論』で述べているように、資本主義以前には貨幣は「支出」と「貯蓄」との矛盾の中にあったが、資本主義成立以後、「蓄積する為に支出する」という形式が可能となり、貨幣は「資本や投資手段」としての機能と「賃金や消費手段」としての機能の 2 つを同時に持つこ

ととなった¹²。この事実をどう理解し、批判するかが問題となる。

文献学的には、DG がマルクス通貨論に関して参照するブリュンホッフと彼らの主張との影響関係や内容比較を行う必要があるが¹³、Read(2008)によれば、賃労働者と資本家とを分ける深淵が、貨幣という同じ対象・象徴により消去させられるという事実を DG は批判している。貨幣は、皆が等しくシステムに参加しているという幻想を与えるものであり、欲望を資本主義の中に留めおく条件として機能している。(そこにおいては金持ちと貧乏人、搾取者と被搾取者との相違は純粋に量的な差異として表現され、我々が誰しも豊かになりうるという観点が拡散される。) 現代の資本主義において欲望は直接的に資本の流れに投資されるのであり、そのレベルにおいて我々は資本主義体制下における主観性の生産を探究せねばならないと Read(2008)は言う。

他方 Tynan (2009) は、DG が銀行の活動や金融操作、信用貨幣について重要性を与えるマルクスの貨幣理論に固執する理由は、二種類の貨幣(支払と金融)との対立の中において差異が消去され剰余価値が実現されると彼らが考えているからだと言う。また Tynan (2009) は、全てを流用し吸収できる「無限の負債」を設立することが国家の機能で、それにより貨幣が一般的等価物として設定されると DG が考えている点や、自らの限界を生きられるものとして持つという資本主義社会の特徴を貨幣が産み出す機能を果たしているという点を強調している。これらの Tynan (2009) の議論についてはその意味や内実が未だ不明瞭な部分も多く、DG の議論のみならず、彼が参照する Harvey らの議論を踏まえつつ再検討する必要があるだろう。

具体的作業としては、以下が必要となる。1) マルクスによる貨幣論(銀行論・金融論)の検討、2) ブリュンホッフによる貨幣論の検討、3) 経済学における貨幣論(銀行論・金融論)との突合せ、4)

「貨幣の二元性」が持つ意味の批判的検討。

1-4. 本源的蓄積

マルクスは『資本論』の中で「本源的蓄積」についてこう述べている。「資本関係を創り出す過程は、労働者を労働諸条件の所有から分離する過程、即ち一方では社会の生活手段と生産手段を資本に、他方では、直接生産者を賃金労働者に転化する過程以外のものではありえない。従って本源的蓄積は、生産者と生産手段との歴史的分離過程に他ならない。それが＜本源的＞として現れるのは、資本と資本に対応する生産様式との前史をなすものだからである。」(『資本論』第24章・第1節)「アメリカの金銀産地の発見、原住民の掃滅と鉱山への埋没、東インド会社の征服と略奪の開始、アフリカの商業的黒人狩猟場への転化・・・このような牧歌的過程が本源的蓄積の主要契機である。」「労働者と労働諸条件との分離過程を完成し、一方の極では社会の生産手段と生活手段とを資本に転化し、反対の極では民衆を賃金労働者に・・・この近代史の作品に転化することは、かくも労多きことだった。もし貨幣が・・・＜類に自然の血痕をつけてこの世に生まれる＞ものならば、資本は頭から爪先まで、毛穴という毛穴から、血と脂とを滴らしつつ生まれるのである。」(『資本論』・第24章・第6節)

この「本源的蓄積論」は、資本主義の発生に関わる問いに関係している。資本主義はどこから来たのかという問いは即ち、資本主義的生産の前提条件としての労働力商品と資本との関係がいかにして発生したかについての解答を求めるものであるが、古典派経済学が勤勉と節約により資本の発生を、怠惰と浪費により賃金労働者の発生を説明するのに対し、マルクスは上記のように資本主義発生に関わる暴力的契機を強調する立場を取る。

この「本源的蓄積論」については多くの研究の積み重ねや諸論者による主張があり、逐一検討する必要がある。DG に関してのみ言えば、彼らは

こう言う。「周縁における流れの脱コード化は、＜脱連節＞により行われる。この脱連節は、伝統的分野の荒廃、外向的経済回路の発展、第三次産業の特別肥大、生産性や収入の極端な不平等を間違いなく実現する。・・・資本主義は、次第に周縁まで分裂症化していく。」(AO,p275)「極めて真実であるのは、本源的蓄積が資本主義の黎明期に一度生じるのではなく、寧ろ永続し再生産されていることである。資本主義は出自資本を広くもたらしていく。」(AO,p275)

Choat(2009)¹⁴によると、DG がマルクスの「本源的蓄積論」の重要性を強調するのは、この論点においてこそマルクスが「経済を政治化する」からである。我々は資本主義が「政治を経済へと還元するという政治性」を持つことを忘却してはならない。「マルクスにとってと同様にドゥルーズとガタリにとっても、資本主義経済が脱政治化作用を持つという認識は、資本主義経済が高度に政治化されているという認識を同時に持つことで基礎づけられねばならない」と彼は言う。(Choat[2009] p24-25) また、Goodchild(1996)は、DG が資本の発展と投資の前提条件としてマルクスの「本源的蓄積」論に依拠しており、今もなお植民地時代と同じく途上国が先進国へと身を提供し続けている点を指摘していると言う。(Goodchild [1996] p119-120)

Choat 及び Goodchild の上記の認識は必要で適切なものであろうが、更に先に進まねばならないだろう。まず文献学的研究としては、DG が参照する従属理論の代表者アミンの著作と DG 自身の言説との共通性や相違点を再検討する必要がある。加えて事柄そのものとしては「本源的蓄積が絶えず再生産されている」という認識自体の妥当性と批判的意味を再考する必要があるだろう。ハーヴェイは本源的蓄積過程について、以下のように言う。「＜略奪による蓄積＞という言葉で私が意味しているのは、マルクスが本源的蓄積として扱った蓄積過程の継続と拡充である。これには土地の商

品化や私有化、貧農人口の強制的追放、諸形態の所有権（共有、集団所有、国有等）の排他的な私的財産権への転換、共有地への権利削減、労働力の商品化とオルタナティブな土着の生産消費形態の抑圧、（自然資源を含む）資産の植民地主義的・新植民地主義的・帝国主義的領有のプロセス……が含まれる。こうしたプロセスを支援し促進するのに決定的役割を果たしているのが、暴力手段と法的正当性を独占している国家である。」¹⁵現在も続くとされる本源的蓄積における国家の役割とは何か、この点も探究する必要がある¹⁶。

2. DG による資本主義への価値評価と提案

本節では、DG が資本主義や資本主義社会をどのようなものとして価値評価していたか、それに対していかなる実践的提案を提出していたかについて、先行研究理解を通じ論点と問題の所在を整理しておきたい。「シニズムの時代としての資本主義」という点と、「脱領土化の運動の加速」という点を取り上げよう。

2-1. シニズムの時代としての資本主義

DG は AO においてこう述べている。「マルクスはしばしば、資本主義がそれ固有のシニズムを敢えて隠さない黄金時代が到来することをほのめかしていた。少なくとも最初は、資本主義は自分の為すこと（剰余価値の収奪）を無視できはしなかった。しかし、資本主義がくいや、誰も盗まれてはいない」と宣言するに至る時、このシニズムは何と大きく成長したことか。……一切のことは、次の二種類の流れの間の不均衡に依拠している。即ち市場資本の経済力の流れと、＜購買力＞の流れである。……通貨と市場、これが資本主義の真の警察である。」（AO,p284）

資本主義をシニズムの時代と捉える彼らのこの理解をどのように理解すべきだろうか。幾つかの先行研究を参照してみよう。

上述の引用文を見る限り、DG は資本主義の為

すこと（剰余価値の収奪）に対して道徳的批判をしているようにも受け取れるのだが、そこに力点を置かない論調が散見される。

例えば Read(2008)は、「DG はシニズムに関する道徳的定義や、道徳的批判のみを提示しているのではない」と述べ、「公理系がコードに置き換わった社会システム、社会機械の構造的な効果」が「シニズムの時代」と呼ばれるとする。全ての生産様式はそれを維持し再生産する主体を生産する必要がある、資本主義以前の社会はそれを信念や欲望というコードを通して実現していた。これに対し資本主義は、専ら貨幣と労働の抽象化によって主体を作り出し維持するという¹⁷。個人はこの時、例えば封建主義時代のように別の個人により支配されるのではなく、「抽象による支配」を受けることとなる。或る意味では、資本主義は主観性と生産様式における一つの革命、古いコードの破綻と専制君主の死という解放として現れる革命であり、DG の試みはこの解放の中に見出される新たな拘束を明らかにすることだと Read(2008)は言う。¹⁸他方、Choat(2009)の言い方を借りれば、資本主義は「信念無しに作動する」ものであり、公理系とは「観念や信念に依拠しない行動様式を押し付ける」ものである。資本主義社会において問題となるのは専ら普遍的基準としての貨幣のみであり、剰余価値と利潤の生産が最重要となる。

上記のような資本主義社会理解については、マルクスや DG、それ以外の資本主義理論家の議論を参照しつつ理解を深める必要があるだろうが、資本主義批判という観点からは何が問題とされるのだろうか。

Read(2008)によると、P.Virno は「形式的包摂から実質的包摂への移行」と「シニズムの深化」とを関係づけている。形式的包摂における抽象が、少なくとも平等原理を認める必要があるのに対し、実質的包摂においては各個人のあらゆる実存・知識・コミュニケーション能力・欲望が生産的とな

ると言う。この時シニズムとは、世界のみならず主観性や人間存在そのものが市場価値へと還元される地点のことであり、そこでは各人の人間としての資本・競争能力を最大化させる闘争が、平等への要求に取って代わるとされる。これは DG の言う「社会的従属」と「機械的隷従」との相違に対応する。¹⁹

我々としては上記論点に関わる DG の言説の再検討を行うと同時に、「主観性や人間存在そのものが市場価値へと還元される」という理解や、「人間としての資本・競争能力を最大化させる闘争が、平等への要求に取って代わる」とされる理解の内実や意義、加えて、それが資本主義社会への批判として提出される認識であるならば、その妥当性や意義を検討する必要があるだろう。DG や DG に影響を受けた理論家が資本主義社会批判を提出しているとして、その妥当性や意義、批判の立脚点は更に明瞭にされる必要があるだろう。

2-2. 脱領土化の運動の加速

DG は AO においてこう述べている。「いかなる革命の道があるのか。・それはアミンが第三世界の国々に助言するように、世界市場から退きファシスト的<経済的解決>を奇妙な形で復活させることであるか。それとも逆方向に進むことか。即ち、市場の運動、脱コード化の運動、脱領土化の運動を更に遠くまで進むことであるか。というのも、恐らく高度にスキゾ的な流れの理論や実践の視点から見れば、諸々の流れはまだ十分に脱領土化しておらず、脱コード化もしていない。ここではプロセスから撤退することではなく、更に進むことだ。ニーチェが言っていたように<プロセスを加速する>ことだ。」(AO,p285)

前節で示唆したように、我々には DG による資本主義社会批判の立脚点を明瞭化する課題が残されているわけだが、同時に我々は DG がどのような方向に資本主義社会の可能性、或いは資本主義社会を批判する運動の可能性を見出していたかを明

瞭に把握する必要があるだろう。彼らは「市場の運動＝脱コード化・脱領土化の運動を更に遠くまで進むこと」や「プロセスを加速すること」を提案している。これをどう理解すべきだろうか。

Read(2008)の表現を借りれば、そもそも資本主義は一方で新たな観念・必要性・経験・可能性を創造すると同時に、他方で現存する富や所有の配分を維持し再生産しようとする二つの側面を持つ。言い換えれば、伝統や規範意識等の無効化(=DG が言うところの「脱領土化」)は、資本主義に栄養を与えると同時にそれを脅かす存在でもある。²⁰ここで注意すべきは、脱領土化の過程は再領土化の過程を伴うとする DG の認識であり、これは近代化が常に古い信念や政治形式・アルカイズムをリバイバルさせることを言うものでもあるが、その一つの事例がファシズムという形の再領土化である。上記引用文にも見られるように、DG は資本主義社会の変革の可能性を再領土化の方向ではなく、「脱領土化の加速」に見出している。これは「逃走線を描くこと」とも表現される方向性であり、Choat(2009)の表現では「資本主義の脱領土化の傾向はどこか予期せぬ地点へ導くポテンシャルを与える」と言われる。²¹

続けて Choat(2010)の理解に従えば、資本主義の欠点を改善する為に産み出されてきた福祉国家・労働組合・銀行への抑制といった制度や施策は、資本主義に新たな公理を追加するのみに留まる。これに対し、「資本主義による脱領土化を更に進展させること」は DG にとっての「革命」だとも言われる。²²或いは DG の理論を「創造性の政治学」・「<中間にある>革命の理論」と表現する Patton はと言えば、「資本主義のスキゾ的傾向の強化」が必要だと述べ、「脱領土化した流れを連結する主体―集団の創造」がそれを可能とするのみならず。更に、「革命的行動プログラムについて、DG はマルクス主義を転倒させる」という Goodchild(1996)によると、「革命の変容」は「集团的労働経験の再構成により生じる新たな主観的

意識の創造」において生まれる。これは、多くのマルクス主義がルサンチマンに由来すると考える Goodchild(1996)にとって、「革命的行動に関するニーチェ的挑戦」だと理解されるものである。²³

上記の先行者の議論を受け、我々としては DG の言う「逃走線」の内実を踏まえた上で²⁴、Patton や Goodchild(1996)が提出する集団や主観的意識について再検討する必要があると同時に、Choat(2010)が挙げている DG 理論自体に関する批判も合わせて再検討する必要があるだろう。例えば DG に対しては、彼らが「欲望」を「脱歴史的絶対」の位置に祭り上げるロマン主義を持っているのではないかという批判や、彼らの「脱領土化・再領土化」という概念があまりにも広範な現象に対し適用される為、その内実や説明能力に限界や過度の抽象性があるのではないかと批判がありうる。²⁵DG における「存在論的抽象性というリスク」の問題は、哲学的理論がどこまで社会的経済的政治的現象に対し有効な議論を組み立てうるかという、より一般的問題にも繋がる重要な問題となるはずである。

結論に代えて

本稿では、ドゥルーズ＝ガタリ資本主義論の本格的再検討に入る予備段階として、検討が必要となるだろう諸論点ごとに諸論者の見解を収集・整理した。本稿で提示した諸論点のそれぞれについて、更に掘り下げた議論を展開するのが次のステップとなろう。

¹ “L’anti-Œdipe”, Gilles Deleuze & Felix Guattari, Les Éditions de minuit, 1972)

²資本蓄積の時代については、モーリス・ドブ『資本主義の発展』を参照する必要もある。

³ Jason Read(2008): “The Age of Cynicism: Deleuze and Guattari on the Production of Subjectivity in Capitalism” (in Deleuze and Politics, Ed. Ian Buchanan & Nicholas Thoburn, Edinburgh University Press, 2008, p139-159

⁴ 『帝国 グローバル化の世界秩序とマルチコードの可能性』(アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート、水嶋一憲ほか訳・以文社・2003) p331-333

⁵ 『コモンウェルス <帝国>を超える革命論 (上・下)』(アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート、水嶋一憲監訳・NHK 出版・2012) p55-58

⁶ Aidan Tynan (2009): “The Marx of Anti-Oedipus” (in Deleuze and Marx, Ed. Dhruv Jain, 2009, Edinburgh Univ Pr)

⁷ DG によると、資本主義が「相対的極限」であるのに対し、分裂症は「絶対的極限」である。「資本主義は・・・相対的極限であり相対的切断である。何故なら資本主義は諸コードの代わりに、極めて厳格な一つの公理系を採用するからである。・・・それは諸々の流れのエネルギーを、脱領土化された社会体としての資本の身体の上に束縛されたままにする。・・・逆に分裂症は絶対的極限であり、それは諸々の流れを脱社会化した器官なき身体の上で自由に流通させる。・・・分裂症は資本主義の外なる極限、つまり資本主義の最も深い傾向の行き着く終着点だが、資本主義はこの傾向を自らに禁じ・・・それを相対的・内在的な極限に代える。資本主義は、一方の手で脱コード化する者を、他方の手で公理系化する。」(AO, p292)

⁸ Goodchild(1996): “Deleuze and Guattari: An Introduction to the Politics of Desire”, Sage Publications, p120

⁹ 「利潤率の傾向的低下」について DG はこう言う。「資本全体に対する剰余価値の傾向的低下という有名な問題が理解されるものになるのは、資本主義の内在野全体においてのみであり、コードの剰余価値が流れの剰余価値に変容するという条件においてのみである。」(AO, p270-271)

¹⁰ Tynan (2009) によると、ハーヴェイが「実現の構造的問題」と呼んだものは、AO に従えば、いかに資本がその内在的極限を何か外部のものに出会わせつつ、絶えず更なる移動に引き戻しうるかという問題と解釈される。Tynan (2009) は、資本が極限を主体自身の中に心理的内在として編みこむという主張を DG が為していると言うが、このあたりの問題系の解釈についてはハーヴェイの『資本の限界』(“The Limits to Capital”, 1982) を参照し理解を深める必要がある。

¹¹ Tynan (2009), p45-46

¹² Jason Read(2008), p152

¹³ 『マルクス金融論』(S・ド・ブリュノフ 他著・河合正修訳・日本経済評論社・1979) を参照する必要がある。Read(2008)は、DG が貨幣を単なる量ではなく、信用や金融や投資等の様々な関係を横断する複雑な関係だとみなす点でブリュノフの

考えを踏襲しているが、ブリュノフが貨幣に関する量的理論の批判に焦点を当てるのに対し、DG は貨幣の観念や、準原因としての貨幣・資本が主観性に対し及ぼす影響に注目する点に相違があると言う。(p152-153)

¹⁴ Choat(2009): “Deleuze,Marx and the Politicisation of Philosophy” (in Deleuze and Marx,Ed.Dhruv Jain,2009, Edinburgh Univ Pr)

¹⁵ 『ネオリベラリズムとは何か』(デヴィッド・ハーヴェイ/本橋哲也訳・青土社・2007) ,p50

¹⁶ 以下の事柄の検討が必要である。1) マルクスにおける「本源的蓄積論」の意味の検討、2) その後の議論文脈（ローザ・ルクセンブルク等）の検討、3) DG による「本源的蓄積」理解の独自性（アミンの従属理論との相違等）、4) 現代も「本源的蓄積」が進展しているという議論（ハーヴェイ、ボーグ）の内実とその妥当性の検討、5) 「本源的蓄積」を「グローバリゼーション」と同一視する理解（ボーグ）の妥当性の検討、6) 「本源的蓄積」を進めている主体の検討（国家？）

¹⁷ 「全ての生産様式は一つの主観性様式と不可分である」という考えについてはマルクスの『グレントリッセ』、資本主義的生産様式と特定のエートス、社会的論理や主体性との繋がりを強調する議論としては『共産党宣言』を参照する必要がある。

¹⁸ Read(2008),p147

¹⁹ Read(2008),p150-151

²⁰ Read(2008),p155

²¹ Choat(2009),p17

²² Choat(2010), “Marx Through Post-Structuralism” ,Continuum,p146

²³ Goodchild(1996), p120-121

²⁴ Read(2008)は、明示的にではないが、DG が資本主義の逃走線として政治的なものよりも美学的・科学的なものを提示しているのではないかと述べている。これは後年、「ノマド的思考」のモデルとして科学や美学を彼らが選択することと対応していると言う。(p159)

²⁵ Choat(2010),p153-154